

現場で使える

クリニカルパス実践テキスト 第2版

日本クリニカルパス学会学術・出版委員会【監修】

評者

真田弘美

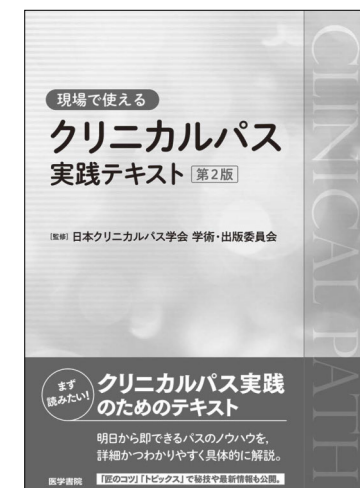
東京大学大学院医学系研究科老年看護学／創傷看護学

本書『現場で使える クリニカルパス実践テキスト 第2版』では、クリニカルパス（以下、パス）の持つ意義を最大限引き出しながら、活用するための基本的ノウハウから実例を踏まえたヒントまで、実践ポイントがふんだんに盛り込まれている。初版と比べるとパスの組織づくりや運用の実例などの内容がさらに充実しており、これからパスを学びたい人はもちろんのこと、既にパスに関わっている医療職にもぜひ手に取っていただきたい1冊である。

パスで重要な点は「患者中心」のアウトカム達成にある。最近入院した友人が見せてくれた入院時の説明の中に、患者用パスが含まれていた。友人は、退院後の予定をあれこれと話し、手術に対する大きな期待を語ってくれた。その話を聞きながら、パスは不安の除去ばかりでなく将来への希望をつなぐ大切な手引きであることを実感した。医療者にとってパスは、最適効率で患者目標を達成し、在院日数短縮を目指すために非常に

合理的な方法であることは違いない。ただ、われわれが忘れてはいけないことを著者らは何度も強調している。誰のためのパスなのか、業務の効率を優先するのではなく、あらためて患者中心のパスであるという極めて大事なマインドを思い出させてくれる。

20年以上も前、褥瘡ケアのパスをつくる企画を担当していたことを思い出した。何をゴールにパスをつくるのか、そのときほど悩んだことはない。褥瘡治療をゴールとするなら、その期間はもちろん重症度で異なり、その基礎疾患で大きく異なる。また、少なくとも治療には半年単位で考える必要があり、入院中の患者に対してはパスでは解決できない状況にあった。この20年間の大きな変化は、病院中心の治す医療から治し支える医療へと、地域に住み続ける療養者支援に大きく舵を切ったことにある。つまり地域包括ケアシステムの導入により、療養場所が病院から、施設、在宅などへと変わっていく。さらには長期にわ



たってフォローアップが必要であることを常に想定した医療体制が必要となる。だからこそ、チームの共通理解のもとに、地域連携クリニカルパスの実装が求められる。この2版には、初版では詳しく触れられていなかった連携パスの組織づくりや実装部分がフォーカスされている。

この書を参考に、電子化パスを踏まえて、再度褥瘡クリニカルパスの作成を関連学会に提案しようと思う。

B5判・180頁

2021年7月

定価：3,850円

(本体3,500円+税10%)

[ISBN978-4-260-04641-1]

医学書院刊